



2020.9.29
独立行政法人日本学生支援機構 令和2年度
「障害学生支援専門テーマ別セミナー」

医療系学部における 発達障害学生の支援について

富山大学 教育・学生支援機構 学生支援センター



アクセシビリティ・コミュニケーション支援室
Hub for Accessibility and Communication Support

コーディネーター(特別支援教育士)
日下部貴史

話の流れ

1. 富山大学の障害学生支援コア組織
2. 富山大学(3キャンパス概要)
3. 発達障害ならではの、医療系学部ならではの課題
4. 事例(Aさん)
5. まとめと課題





富山大学の障害学生支援コア組織

教育・学生支援機構

就職・キャリア支援センター

学生支援センター

紹介

各学部, 教養教育
(教職員から)

紹介



アクセシビリティ・コミュニケーション支援

- ▶ **トータルコミュニケーション支援部門
(発達障害学生支援)**
- ▶ **身体障害学生支援部門**

2007年設置: 14年目

障害学生支援のコア組織

紹介

学生相談室
(旧 何でも相談)

紹介

保健管理センター

紹介

室長1名(兼任)
専任講師1名
学生相談員3名
事務補佐員2名

学部教員・職員
教養教育担当教職員
実習担当教員

修学

- 履修・スケジュール管理
- 受講時の合理的配慮に関する調整
- レポート・卒論サポート
- 実習サポート

【学内】
就職・キャリア支援センター
【学外】
地域就労支援機関
公共職業安定所
就労移行支援事業所
地域障害者職業センター

キャリア

- 就職活動スケジュール管理
- 自己PR・志望動機等作成サポート
- 面接に関する事前・事後サポート

アクセシビリティ・コミュニケーション支援室

サポート・チーム全体のマネジメント

- 体調を考慮しながらの修学支援

メンタル

【学内】
保健管理センター
【学外】
地域医療機関

カウンセリング
体調管理
服薬指導



富山大学 (3キャンパス概要)

高岡キャンパス

富山湾
Toyama bay

芸術文化学部

※支援室のコーディネーター
1名が週1回(火曜日)に常駐

杉谷キャンパス

【医薬系学部】

医学部: 医学科
看護学科
薬学部: 薬学科
創薬学科

※支援室のコーディネーター1名が
週1回(木曜日)に常駐

五福キャンパス

経済学部、人文学部、人間発達科学部
理学部、工学部、都市デザイン学部

室長1名 (兼任)
専任講師1名
コーディネーター3名
事務補佐員2名



発達障害の学生ならではの課題

1. 支援を受けてきた経験がない

- ✓ 困っていることの自覚
- ✓ 「助けを求めること」や「頼ること」に不慣れ

2. 情報をキャッチすることの苦手さ

- ✓ 重要な情報の取りこぼし
- ✓ 横(同級生)や縦(先輩)とのつながりの希薄さ

3. 実習系における課題遂行の困難さ

- ✓ 過密スケジュールへの対応
- ✓ 実験毎に課せられる課題レポート等の作成
- ✓ 不器用さによる実験の失敗

4. 研究室配属後の研究やコミュニケーションの課題

- ✓ 密な環境でのコミュニケーション様式への適応

5. オンライン授業による環境変化に対する混乱



医療系学部ならではの課題

1. 医療系資格取得への明確な意志の希薄さ

- ✓ 座学での勉強が得意
- ✓ 「国家資格さえあれば何とかなるのではないか」という考え

2. 過密な時間割

- ✓ 1年時から常に時間割が目いっぱい詰まっており、面談の時間がない。
→ 定期面談の難しさ
- ✓ お昼休み等の少ない時間のワンチャンスの面談しかなく、十分な対話ができない。
→ 語りを通しての自己理解を育む時間がない。

3. 留年生が中心

- ✓ 支援のスタートが、もうあとがない状況で始まることが多い。
- ✓ 未診断で本人に気づきがなく、病院受診にも時間がかかる。

事例

Aさん(女子学生):ASD+ADHD(不注意型)

未診断でつながらり、入学後、病院受診
に至った支援事例

※事例については、個人が特定されないよう複合事例としています。

初回面談での語り



学生の語り

- 中学・高校時代の宿題や課題は、ほとんどといっていいほど提出できなかった。
- 授業中に先生が言った「言葉」が気になって、そのまま、そのことばかりを考えてしまい、気づいたら講義が終わっていた。
- 掲示板や学部からのメールを見忘れて、いつも、とんでもない事態になってから気づく。
- 手先が不器用で…様々なことに人よりも時間がかかってしまう
- 自分は、まわりと何か違うといった違和感もあった。

- 幼少期から他の子とは違う感じがしていました。
- 昔から、とにかく提出物が出せない子でした。
- 唯一、課題が出せたのが、担任の先生が「ここで残って、課題をやってから帰るように」言われたときだけでした。
- できれば、病院受診して本人の特性のことを知りたいです。



家族の語り

※本人および家族の意向により病院を受診する
→ASDとADHDの診断

医療系学部 Aさんへの支援内容

パーソナル支援

- 定期面談(週1回)
 - スケジュール管理
 - 修学状況の確認
(出席、課題、レポート)
- 学習場所の確保
- 特性についての振り返り

家族支援

- 特性理解のための定期面談(月1回)
- 本人への励ましと見守り
- 生活面(朝の電話やアパートの部屋の掃除や食材買い出し等)でのサポート



コミュニケーション支援

- 「ランチ・ラボ」への参加


学部との連携・調整

- 障害特性に関する確認
- 提出物の確認、掲示板の確認
←学部教員、教務
- 実験や研究室における支援
←院生、指導教員

パーソナル支援：スケジュール管理

- スケジュール手帳の利用
- 書く「タイミング」と情報を「一元化」する練習を支援室面談の中でおこなう。

※面談の中で「**今ここで**」の支援（習慣化する）



・面談でスケジュール手帳を使うようになってから、面談中に必ず、スケジュール手帳を開き、そこで大事な情報（課題や試験日等）を記入するようになりました。

・はじめは面談中だけに開くスケジュール手帳が、いつの間にか、家や授業中にも手帳を開き、確認するような習慣がついていました。

パーソナル支援：学習場所の確保

- 課題（実験レポート）作成における学習場所を確保。
- 家では様々な誘惑が多く、課題作成に向かうものの集中ができなかった。



- 学習場所を借りて、課題作成をするようになってから「スイッチ」が入りやすくなりました。
- 最近では、面談室じゃない他の場所、たとえば図書館とかでも課題作成ができるようになってきました。

学部との連携・調整

- 発達障害学生との対話のコツや支援方法（視覚化等）を伝える
- 学内・学外実習を見据えた「本人特性」の情報共有
 - ✓ 指示に対する態度
 - ✓ 報連相における内容とタイミング
- 本人にあった実習先の調整と確保
- 卒業後の進路選択肢を広げるための情報共有

家族支援（家族との連携）

・保護者面談の内容（月1回の面談を実施）

- ① 受診後の特性理解 → 診断を受けて、本人の特性理解を共有する
- ② 生活基盤の確認 → 修学を支えるために生活環境の調整
- ③ 修学状況の確認 → 授業や単位修得の状況と今後の見通し
- ④ 学部との連携状況 → 学部教員との連携に関する情報共有・支援方針に関する相談

・保護者面談のポイント

- 修学状況を正確に伝える。
- Aさんの努力している点を具体的な状況を入れながら説明する。
- 家庭で実行可能なサポートを提案する。
- 卒後（就職）についての見通しを話し、障害特性への理解を深める。

※家族も含めた支援チームを形成する。

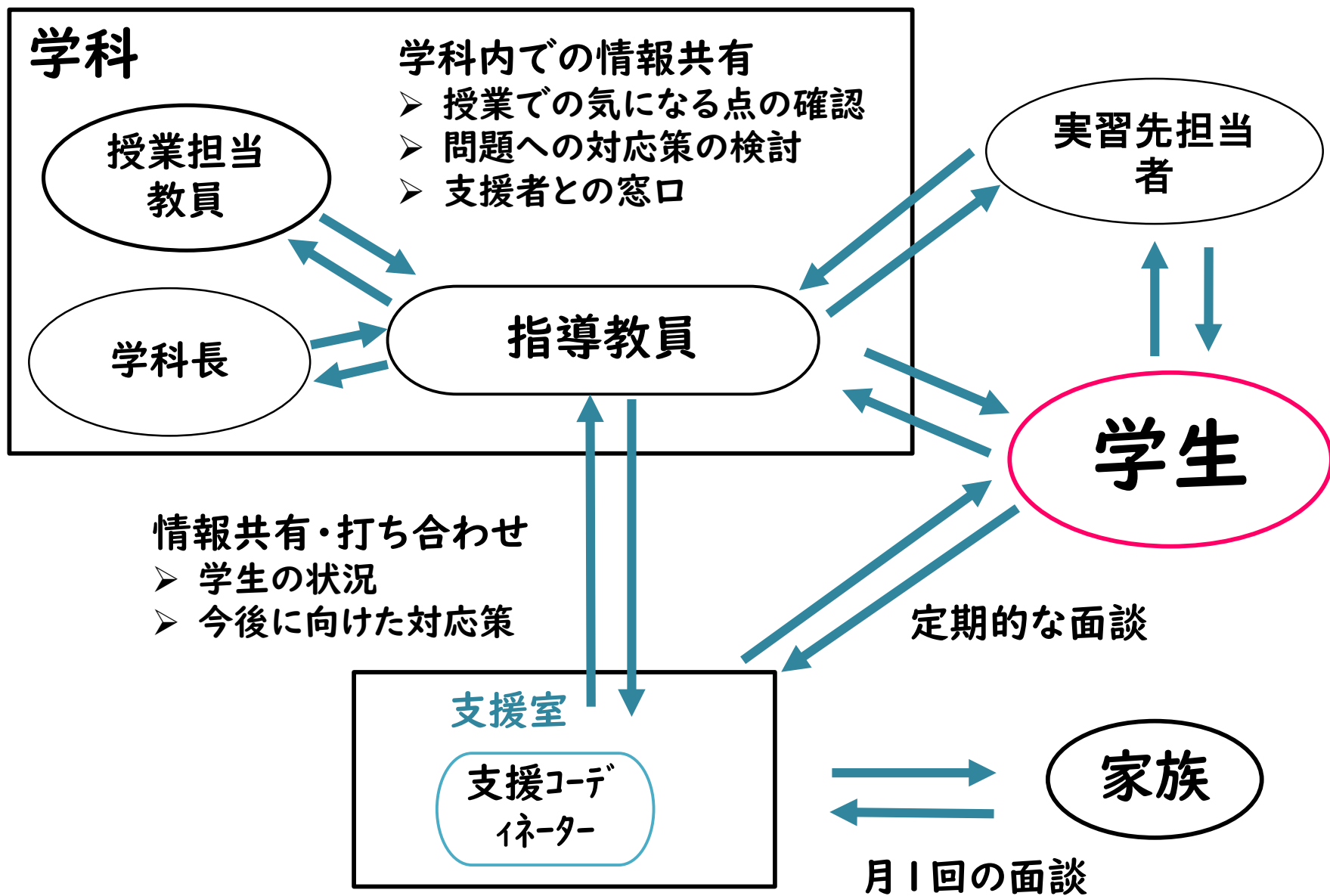
単位取得→卒業→就職に向けて

- その後、Aさんは順調に単位取得ができるようになった。
- 面談でも自身の障害特性を理解し、日常に生かすようになる。
- 学外・学外実習も理解のある実習先で最後まで実施できた。
- 今現在は、資格取得に向けてに日々勉強し、卒業後の進路も自分にあったペースで検討している。

- 専門科目の理論的な勉強は得意です。授業では板書をノートにしっかりとることで、帰宅してからの復習に活かしています。専門科目の勉強は私に合っていると思います。
- 毎回の支援室面談を通して、自分の特性（得意なことや苦手なこと）について、より深く考えるようになりました。自分ひとりだと理解に至らない部分を支援者と話し合うことによって、自分の頭の中を整理できるようになりました。



一人の学生に対するチーム支援のイメージ



まとめ ①

- コーディネーターが支援の中で行っていること
 - ✓ 実行を支える支援→面談以外の「他の場面」への汎化
 - ✓ パーソナル支援→キャリア教育としての役割
 - ✓ 「自己理解」と「セルフ・アドボカシースキル」の育成
 - ✓ チーム支援→学生の戸惑いや混乱を最小限にする

まとめ ②

■ 発達障害学生に関わる医療系教職員への支援

- ✓ 突発的な環境変化への脆弱性が露呈する。
→これまで出来ていたことが一気にできなくなることへの理解と対応
- ✓ 身体障害学生の場合、支援ニーズが見えやすく、教職員側も支援に対する心構えが持続するが、発達障害学生の場合、その都度、教職員側に戸惑いがみられる。
- ✓ 資格取得に行きつくまでにいくつものハードル（通常起こりえないことが頻発する）があり、そのたびに教員側は「もうこれ以上は厳しいのでは…」という思いを持ってしまいがち。

➤ 支援コーディネータの存在

- 揺れや不安を支えるべく、全体を少し離れた位置から見渡す。
- あきらめそうになる気持ちを、合理的配慮の観点から支え続ける。

ご清聴ありがとうございました。

